



戦国の四公子② (平原君と春申君)

3月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年3月10日(金)

平原君趙勝は趙の恵文王の弟である。

器量が優れ、公平な人柄で食客を重んじた。このため食客は数千人に達したという。趙王は「長平の戦い(BC260)」で起用した名将軍「廉頗」が、専ら防御策をとったのを不満に思い、亡き名将「趙奢」の子「趙括」に変えた。

このとき「刎頸の友」で有名な、「藺相如」が参内し、「王が趙括を使うのは柱に膠して瑟を鼓するがごとし。その父の書伝を読むのみ、実践を知らざるなり」と、応用力のない若い将軍趙括の起用に反対した。そして趙は40万人もの将兵の戦死を招くという大敗を被った。

その2年後には、また秦軍の猛攻を支えきれず「国郡邯鄲」まで包囲され、趙の運命は今や風前の灯となった。

趙王は平原君を呼び寄せ、楚に使いして来援を請うように命じた。

この時食客の中で今まで全く頭角を現さず平原君が無能と思っていた「毛遂」という男が知勇兼備の使者20人の中に加えるよう名乗り出た。彼は自分の能力は「囊中の錐」の如く他に卓越していると宣伝し、平原君は渋々使者に加えた。ところが楚との交渉では大活躍をし、楚の援軍が出兵した。

平原君は帰国後、自分の人を見る目のうぬぼれを「毛先生、三寸の舌をもって百万の師より疆かり」と言って、己の不明を恥じた。

楚が秦に国郡「郢」を奪われて、遙か東北方の陳に移ることを余儀なくされた。この時、楚の春申君は秦の昭王に上書して、楚と盟約を結ぶことの利を説き、楚の太子完と共に人質として秦に赴いた。

数年の後、楚の頃襄王重体の報せを接すると、秦を欺いて太子完を脱出させ、自分は死をもって事態の処理に当たろうとした。秦は春申君の忠誠に感じ帰国することを許した。

著名な学者「荀子」を県令に起用するなど楚は再び強盛となった。しかし、楚、韓、魏、趙、衛の五カ国同盟で秦と戦ったが連合軍は函谷関において脆くも崩れ去った。敗戦の責任は春申君に帰せられた。

司馬遷が平原君について、長平の戦いを起こし、「濁世の佳公子」ではあるが、大局を見る目がなかったとし、公平で私欲は少なかったが政治家としてはそれほど的人物ではなかったと評している。

また、春申君については、楚の宰相を二十数年間務め、若い頃、秦の昭王を説き伏せ、わが身を犠牲にしたり、たいへんの智謀の主であったが、最後は老いぼれてしまったと評している。